

令和8年2月28日

令和8年熊本市消防団意見発表

「教育現場における防火・防災意識の向上と消防団の繋がり」

第4方面隊 第28分団 隊員 後藤 黎射

熊本市には何台の消防車があるでしょう？

私は、数学教師として勤務している高等学校で、毎年、新入生に質問を投げかけます。

所属する消防団の活動を知ってほしい、そんな思いも確かにありますが、それ以上に防火・防災意識を高め、有事の際に自分自身や誰かのために行動できる大人へと成長してほしい、そう考えているからです。

私が生徒との対話の中で感じたことですが、火事はニュースで見るもの、自分の居場所ではまず起こらないものであるという甘い認識を持った高校生が、残念ながら少なくありません。中学校までに学校教育や家庭教育で災害や防災についての学びの機会がたくさんあります。しかしながら自分の人生に関わることであるという現実味が薄く、15歳の子供たちにとっては10年前の熊本地震も遠い幼少期の記憶に変わりつつあるように感じました。

私はこの現状を変えていく必要性を強く感じています。いざというときに行動できる社会人になるため、成人年齢を迎え、社会へ出る時期にこそ防火・防災のことを改めて考える必要があると思います。そこで私は、実際に高等学校の探究活動で授業をしました。

内容は根本的なことから始めます。例えば、炎には想像を遥かに超えた熱量があること、炎だけでなく煙にも生命を奪う重大な要素があること、大雨をはじめ自然のエネルギーは人間の生活にとってどのような脅威であるか、などです。正月飾りを燃やすどんと焼きの炎ですら、数メートルの距離でもまつ毛が焦げたり顔を覆いたくなるような熱さであることを話すと驚きの声があがります。次に、消防局の救命活動や消火活動、地域の一員として活動する消防団についてです。年間の火災件数、主な原因、組織の存在意義や役割、消防団として実際に活動したやりがいについて話しました。その他、専門知識にも触れてみました。避難器具や消火設備、防災品や不燃材料の種類など、物理的、化学的な話は生徒の反応が良く、興味深く聞いてくれるので私も熱が入ります。

学校では身近な設備である、消火器や非常ベル、避難はしご、消火栓については、学校内を歩きながら説明をします。設置場所のルール、使い方など授業の準備として仕組みや法規の知識を蓄えていくうちに、私自身が消防設備士の資格を2種類取得することに繋がりました。それを活かして、先生は消火器を詰め替える資格を持っているよ、と話しかけたり、天井を指差し、感知機の種類や仕組みを話すことが、今では生徒の関心をひき、授業として防火・防災の話をするきっかけとなっています。

さて、昨今報道もされる機会が多くなった消防団員のなり手不足問題は、地域の防災力を低下させる喫緊の課題です。世界的な感染症の流行等で地域のつながりが希薄になった時期を経て、近所の呼びかけで入団される方も減ってしまったのではないのでしょうか。

一方で、私が教育現場で肌で感じる、地域のため、誰かのために力になりたいと考える高校生の数は決して少なくはありません。職業として消防吏員を目指さなくとも、いざというときに行動したい、できる範囲内で役に立ちたい、そんな思いをもった高校生にたくさん出会ってきました。

以上のことから私は、教育現場における消防団で強化すべき役割を次の3つと考えます。

一つ目は、地域の生きた防災知識を年齢問わず共有することです。どのくらいの雨量で地域の川が氾濫するのか、など実際の地形や過去の災害経験などをもとに、教科書では学べない、自分たちの町を守る知識を共有し、伝えることが重要だと考えます。

二つ目は、次世代の地域防災の担い手を育てることです。ボランティア活動などで学生の参加率を高め、門戸を広げ、若い世代にも活躍・実践の場を与えると良いのではないのでしょうか。訓練や行事を消防団と一緒に活動することで交流を深め、郷土愛を育み、将来的な消防団員の確保に繋がると考えます。

三つ目は、平時の繋がりを作ることです。日頃から消防団が学校行事に参画することを増やすことで、自治体・学校・地域の3者の繋がりがさらに強く構築されます。これが、災害が発生した際の避難所のスムーズな運営等、有事の際の強固な基盤となると考えます。

最後になりますが、防火・防災は、過去から学び、未来に備えることに他なりません。消防団には子供を育て、地域を育てる役割もあると思います。私はこれからも、一人の消防団員、一人の教員として教壇に立ち、未来を担う若者一人ひとりと一緒に、防火・防災意識及び行動力の向上をはかって参りたいと考えています。